

(8) 母と子で漢字カード取り競争 反復の上にも反復する

一日一字の漢字学習を始めたら、毎日、怠らずに実行して下さい。もし、一回も欠かさずに三か月も実行するなら、ほぼ90字の漢字が読めるようになるはずですが、しかし、始めて三か月ぐらいつと脱落するお母さんがぼつぼつふえる頃なので、持続するよう心がけてください。

昔の人は「石の上にも三年」と言って、どんなに辛い仕事でも辛抱してやり通したものです。この仕事は、親と子の心を結ぶ何よりも楽しい“遊び”です。初めは喜ばないようでも、きっと心の奥底では望むに違いない好ましい“遊び”です。それが三年と辛抱できないようでは、全く“だめな母親”と言われても仕方ありません。まして、三か月もたないようではお話になりません。ぜひとも自分に鞭うってがんばって下さい。

さて、(7)で、記憶の原理は、“関心”と“反復”の二つだと言いました。今の学校教育でも家庭教育でも、最もいけないと私が思っていることは、“反復学習”を軽視していることです。理解だけが重視され、理解できれば先へ先へと進ませたがります。だから、反復が足りず、従って能力が育たないのです。

ヴァイオリンで有名な鈴木統一先生の鈴木メソッドが、従来の教育と最も異なる点は、この“反復”を重視している点です。この“反復”が人間の能力を育て、才能を作るのです。孔子は「学んでこれを習う、また

悦ばしからずや」と言いました。学問をして理解できたところをくり返しくり返し練習していると、それが身につき、自然と自分の才能が伸びていることに気がつく。それが実に楽しい。そういう意味の言葉で、“学習”という言葉はそれから生まれました。だから、反復練習の伴わない“学習”など、ほんとは“学習”とは言えないものです。

一日6回の反復練習を7日間続ける。つまり、一枚の漢字を42回読むという練習は、才能を作るためには最小限必要なもので、出来ればもっともっと練習させた方がよいのです。そこで、お奨めしたいのが、“漢字カード取り競争”です。一月分もしくは二月分の漢字カードを、カルタ取りのようにして取り合うのです。

お父さんもしくはお母さんが読み手になり、読んだ漢字を親子で取り合うのです。初めは手加減しなければ勝負にならないと思うでしょうが、どうしてお父さんお母さんがいくらがんばっても、とても勝てないように直ぐになります。

これを3年間続けて下さい。子どもの能力は驚くほど伸び、必ず「やって良かった」と思う日が来ます。そして子どもが成人した後、振り返って最も楽しい思い出として一生を楽しませてくれるのが、この“漢字カード取り競争”であることを予言します。

さて、もう一回だけ学習漢字を書いておきます。

虎、熊、鹿、鼠、狸、狐、河馬、駱駝、麒麟、金魚、風、雷、雲、雪、お日様、月、星、青、赤、黄色、白、黒、紅茶、砂糖、机、椅子、冷蔵庫、電話、時計、新聞。